

至テ十一丈、枝ゴトニ枝ヲナス、ソノ數百五十八本アリ、傳テ菅公ノ神木ナリト云、又泉州左海難波屋ノ松ハ、高サ僅ニ三尺許ニシテ、四方ニ布クコト數丈、枝下ノ枝三百餘柱ニ至ル、

○唐崎ノ松ノ事ハ、神祇部神木篇ニ詳ナリ、

〔本朝奇跡談〕中同國野日光の内如山に、這松と云名木有、五葉にして貳里、四方有と云、此松を見るに拾八九町程も有と見ゆる、根の方は谷にして上よりは見へず、此木高サ三四尺計にして、段々四方へ這ひはびこりたり、無類の名木なり、

〔松屋筆記八十〕松の名木

陸奥桑折宿に判官の腰掛松あり、身木の高さ一丈許にて、枝十五本四方に出、そのわたり四十五間あり、諸人其間をわけ入て枝にこしかけ、茶菓烟草を服用し、松のさまを賞觀す、枝間こ、かしこに茶屋ありて、客を引こと實に奇絶の名木也、一の城戸、下紐の關などもこ、に並たり、さるに天保二三年の比にや、火に焼失たりといへるは、口をしきわざ也かし、同國南部盛岡より八九里北に雪浦村あり、そこにまだり松とて、めぐり一丈五六尺、高さ數十丈の松あり、枝ことくくまだれて、行人の笠を拂ふ、實に世の珍木也、志摩國鳥羽より一里ばかり東に波分オモワケとて大樹あり、其形無雙の奇觀也、

〔東遊雜記〕石母田村代國といふ所に、街道三丁計義經の腰掛松と云名木あり、其木の大きサ二抱半、高サ凡一丈、枝葉八方にたれ、枝の地に入りし所二所、南北十間餘、東西十二間餘、廻りを周り見しに百七十歩、播州曾根の松にさして劣らぬ松なり、まかし女松也、

〔南紀名勝略志四〕高郡岩代ノ結松

岩代ノ庄、岩代村ノ岸ノ上ニ有、

〔萬葉集二〕長忌寸意吉磨見結松哀咽歌二首